

Öle VII" 1961. 170 (Akademie-Verlag, Berlin). 8) G. A. Fester, E. A. Martinuzzi, J. A. Retamer, A. Ricciardi, F. Taboada, Chem. Abstr. 1957, 6083; E. Gildemeister, Fr. Hoffmann, "Äth. Öle VII" 1961, 171. 9) P. L. Reitsema, J. Am. Chem. Soc. 78: 5022 (1956); P. L. Reitsema, V. J. Varnis, J. Am. Chem. Soc. 78: 3792 (1956); 藤田, 香料 48: 50 (1958). 10) C. Epling, Fedde Repert. Beih. 85: 159 (1936). 11) A. Gürgen, Chem. Abstr. 1948, 6059. 12) A. Manjarrez, J. Iriarte, Chem. Abstr. 1953, 9572. 13) E. Gildemeister, Fr. Hoffmann, "Äth. Öle III" 1931, 726 (Schim. & Co.). 14) Y. R. Naves, Helv. Chim. Acta 31: 29 (1948); 藤田, 大工試報告, 303: 13 (1954).

Summary

The theory of continental drift can be more safely accepted from the mode of appearance of essential oil constituents of Lamiales plants that is growing both in Africa and South America.

○寒椿について (津山 尚) Takasi TUYAMA: On *Camellia hiemalis* Nakai

故中井猛之進教授が、本誌 16: 695 (1940) で新種として出版された *Camellia hiemalis* Nakai カンツパキの所属については、今まで明かに論じられたことはない。Kew Gardens の Dr. J. R. Sealy は大著 A Revision of the Genus *Camellia* p. 211 (1959) でこの植物を第 17 章の Doubtful, imperfectly known and excluded species の中に入れている。彼は簡略に中井教授の説を紹介し、かつ、原寛教授から送られた type specimen の写真をもとにして、この植物がサザンカの一型ではないかと言っている。小生はこの植物を 20 年近くも自分の庭で大切に育て、移居の時にも一緒にもって来て、毎年花を見ている。今ではこれが直径 7 cm の“大木”になり毎冬千個以上の花をつけるほどになった。大木と云っても枝は水平に広がるので高さは未だ 1 m にも達していない。平均 0.5% 位結実するが、近くにサザンカの他の品種も植えてあるので、花粉をどこから受けたか分らない。中井教授の記載によると、「葉が横拡がりて、枝は灌木性、葉はより大形であることによってサザンカと異なる」という。半八重濃桃紅一紅色のこの植物が、ツバキ属の新種とは考えられない。この植物が中国産の *C. oleifera* Abel 油茶と関係があるかどうかについても議論がある。この種は中国の中、南、西部(台湾を含む)、インドシナに広く分布し、その葉形などに関する変化は著しいが、サザンカとは別種とされている。小生は Hongkong から野生品の標本を 1958 年に持帰った。原寛氏も 1960 年同所から生品を持帰ってこれを栽培している。これらの観察から *C. oleifera* は *C. japonica* ツバキ、と別種であることは勿論、*C. hiemalis* Nakai はサ

ザンカの一園芸品種と見るべきであるとの結論に達した。津山・二口：日本椿集の p. 400, pl. 227 に細かにこれらの点が論じてあるから参照されたい。したがって学名は次のようになる。

***Camellia Sasanqua* Thunb. cultivar. *hiemalis* (Nakai) Tuyama stat. nov.**

Camellia hiemalis Nakai in Journ. Jap. Bot. **16**: 695 (19400); Sealy, Rev. Gen. *Camellia*: 212 (1958), included in “doubtful, imperfectly known species.”

Camellia oleosa Nakai in Act. Phytotax. Geobot. **14**: 62 (1950); citing *C. hiemalis* Nakai as synonym.

Nom. Jap. Kantsubaki.

Icon.: Tuyama et Futakuchi: *Camellia Cultivars of Japan*, pl. 227 (1966), the figure is based on the tree in Tuyama's private garden for over some dozen years.

この結論をもって同学の原寛氏に話したら、氏も 10 数年来カンツバキを自庭に栽培した Hongkong からの *C. oleifera* との比較から小生と同じ結論に達しているとのことであった。

原氏と小生とは葉の光沢、その表裏の差、鋸歯などが、油茶よりもはるかにサザンカに近いということに、各自独立の研究によって一致した。氏が寒椿を *Camellia oleosa* Lour. ex Jackson (現在油茶の異名) の変種にあつかった時にも、油茶とは相当異なるものと考えてやったこと (Hara, Enum. Spermat. Jap. **3**: 162, 1954) である旨の話を聞いた。この場合氏は唐衣 (Karagoromo) と寒椿とを同品種と見て, var *Karagoromo* (Nakai) Hara, l.c. の学名を出版したが、唐衣はまた別の品種と認められるから、この学名は寒椿の異名に入れない。

ここに注意すべきは中井教授が寒椿を最初に出版された時に、「15 年ほど前 (1940 年当時一津山註) にこの植物が上海から輸入されはじめ、鉢植がクリスマスや新年の飾りに用いられた。」とあることである。小生は宇和島附近で相当の大樹を多数見ているし (1959 年)、原氏も第 2 次世界大戦以前から熱海附近で同様のものを多数見ている由で、これが中井教授の言われるようにして上海から輸入されたものであるかどうかは疑わしい気がする。なお、中井教授の「寒椿」の identity については、タイプが現に東大植物学教室にあるから疑の余地はない。このカンツバキは関西では獅子頭 (Shishigashira, 東京でいう桃色唐子咲のものとは同名異品種) とこの寒椿に至近の品種で、枝が直立性で、伸長力のよい一品種に立寒 (Tachikan) と称されているものがある。病害に強く、垣根用ツバキの台木に適するといわれる。立寒は立寒椿の略称で、前には愛知県祖父江町で勘次郎サザンカ、名古屋サザンカ、紅サザンカの名で呼ばれていたことがある。花色は寒椿に比べて紅が濃く花卉の重なりが少し少く、花も少し小さい様である。東京、安行でもよく開花する。

なお江戸時代の寒椿は当時の 1—2 の写本によると白色一重の品種となっていて今のものとは異なる。本来寒椿は寒中に咲いたツバキ、あるいはもっとせまく寒中に咲く品種の一般名であったのであり、これが上記した今日の寒椿という品種の名として定着したまでの話である。小生は本品種に関して細胞学的には全く研究をしていないから、将来の研究にまつ所も多い。